

ともに 歩もう 石巻だより

子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

佐々木明日香ちゃん〔6歳〕

三輪車で姉のお見送り

「おつとう」「おつかあ」

父純さんと母めぐみさん

を呼ぶその声は今も2人

の耳に残っている。

祖母は「ばあちゃん」。4歳上の姉は「お

姉たん」だつたり「お姉ちゃん」だつたり。

2人姉妹の妹だつた。

姉の名前は母が決めたので、妹の名前は

父が決めるに。父が候補を並べ、最後

に「あすか」を選んだのは、姉だつた。

姉のまねをしたがる妹だつた。姉が勉強

する傍らで、自分も紙に向かう。祖母が教え、

平仮名は全部書けるようになつた。

あの頃の住まいは、道路をはさんだ向か

いに小学校があつた。

朝。小学生の姉がピンク色のランドセル

を背負つて靴を履く。時に明日香ちゃんも

急ぐ。三輪車にまたがり、「お姉ちゃんのこ

と送つてくるから」。勢いよくペダルをこぎ

だす。玄関前から道路までのおよそ20秒の

距離を一緒に通つた。

「お姉ちゃんと行くんだ」と小学

校入学を楽しみにしていた。ランドセルは

迷わず水色に決めた。「私の、これだから」と抱きかかえてレジ台へ持つていつた。

それを背負つて校門をくぐることはな

かつた。2013年3月、卒業式を数日後

に控えた6年生の姉がその水色のランドセ

ルを背負つて登校した。

ピンク色が水色になるのだから、友だち

に何か言われるかもしれない。とても緊張

したはず。それでも、妹を小学校へ連れて

行けるのは自分しかいない、と心を決めて

くれた姉に、母は心底、感謝している。

この記憶が母の心に刺さつていて。姉に

書き残しておきたい。忘れないでほしい。

親になつた時、繰り返さぬよう。自分と同

じ思いを味あわせたくないから。

その夜。いつものように親子4人の布団

を並べて休んだ。「おやすみ」と父が声をか

けると、「おやすみ」。布団から声が返つ

てきた。父は朝6時の出勤に備え、すぐ寝

た。布団の中で必死に足を動かし、泣い

ない。

親子4人、並べた布団で

伝えたい。過ぎ去った日々のあの笑顔を。
暗闇に立ちすくんだ時、
この記録が足元を照らす光となるように。
そしてまた明日の朝を迎えるように。
朝日新聞社員がつづる。

明日香ちゃんを出迎えた。
朝は、母の車で約5キ

ロ先の日和幼稚園へ。
帰りは園のバスで

送られてくる。
顔で話し始めた。

「今日ね」と真

いぶかしむ口調。

「お友だちのおうちを

ぐるっとまわった」。内陸の家とは反対側の

海側をバスはまわった。バスは内陸に住む

園児だけが乗るのに、なぜ。一瞬、思つたが、

「卒園前のサプライズかな」とがめなかつた。

この記憶が母の心に刺さつていて。姉に

書き残しておきたい。忘れないでほしい。

親になつた時、繰り返さぬよう。自分と同

じ思いを味あわせたくないから。

その夜。いつものように親子4人の布団

を並べて休んだ。「おやすみ」と父が声をか

けると、「おやすみ」。布団から声が返つ

てきた。父は朝6時の出勤に備え、すぐ寝

た。布団の中で必死に足を動かし、泣い

ない。

明日の風

今年の夏の初めのこと。中身は捨てたんですが、封筒は捨てられなくて……。母はそう話しながら、きれいで、私に見せてくれた▼宛名は「佐藤愛梨様」。長女の名前。これは捨てられましたね……。長女は石巻市の小学校入学を控えた3年前の3月11日、幼稚園のバスに乗せられて海辺へ。津波の犠牲になつた▼さらに海側をバスはまわった。バスは内陸に住む園児だけが乗るのに、なぜ。一瞬、思つたが、今年8月25日。今度は、電話がかかつてきました。女性の声で「4年生のお子さんがいらっしゃいますね」▼その後、小学4年生になるはずだった。春から何度も何度も思つていてことだ。母親が返答に詰まつていると、女性は「保護者の方はいらっしゃいますか」▼「はい、私が4年生の親ですって、私が4年生の親ですって、私も言いたいです」と叫びたい気持ちをこころえ、母親は聞き返した。「どうしてこちらの電話番号がわかつたのですか」▼「電話帳で

ている。こわい夢でも見たのか。「大丈夫、大丈夫、寝なさい」。ポンポンとやさしく布団の上からたたいた。

その日は、赤いチェックのシャツに、星模様がついた青いトレーナー、紺色のズボンを着せた。

いつものように車で送ったが、その日に限り、「いってらっしゃい」と見送る母を確認するように何度もふりかえり、園庭を歩いていく。そのつど「大丈夫ね」と声をかけた。「うん」「うん」とうなずいては小さく手をふっていた。

地震の時。母は家にいた。防災行政無線を聞くより先、激しい揺れに確信した。

津波が、絶対、来る。

明日香ちゃんを出産した04年の暮れにテレビで見た、スマトラ沖地震の光景が、脳裏によみがえる。小学4年生の姉を連れて駐車場へ。園のバスを待つた。

前日同様、海側をまわるなら、地震前にバスは出ただろう。行き違いになりたくない。「お母さん、警報が鳴ってる」と青ざめた姉。「わかる、わかる」。母も動転していた。祖母も来た。迎えに行こうにも、道路が冠水し、行けない。

父も帰宅した。明日香ちゃんは戻つていいと思い込んで帰ってきた父は、まだどう知つた時点から記憶が定かでない。

さらに内陸へ車で避難し、車中で夜を明かす。海側が明るい。時折、夜空にのぼる火柱を見つめながら、母は、無事を念じた。地震の時。明日香ちゃんは園にいた。園は、高台の日和山の標高約23メートルの所に立

つ。約15分後、園は12人の園児をバスに乗せた。7人は海側に、明日香ちゃんとち5人は内陸に、家がある。

5人は本来、7人とは別に、内陸へ直行するバスで帰ることになつていて。が、激しい余震の中、一緒に海沿いの家まで連れてい行かれた。

約40分後、津波が到達。バスは渋滞に巻き込まれていた。海側の7人は、保護者らに引き取られた後だ。一帯の波の高さは約7メートルにおよんだ。5人が残されたバスは、津波に襲われ、炎に包まれた。

3日後、家族は徒歩で園へ向かつた。一言も発することなく、黙々と歩く。

日和山をのぼり、海側へ向かう。その時、制止をふりきり、母は駆け出した。海側に変わり果てた光景が広がる。息をのんだ。

園から約200メートル先の坂の下でバスを捜した。焦げてはいたが、わずかに残つていたトレーナーの星模様を、母は確認した。

11年8月、園児3人の遺族と共に両親は園に対して損害賠償を求める訴訟に踏み切つた。なぜ、あの地震の後に海側へ下ろしたのか。その真相を知りたかった。

「そのまま園にいれば、当然、今も生きているはずなのに」

園側の主張によると、園児たちは余震が起きたたびに不安な顔を見せていたため、一刻でも早く保護者の元へ送り、園児を安心させたいと考えた、という。

父は「一刻も早く、と言ったら、職員各自の車で送ればよかった」と憤る。「遠回りして海沿いまで行くバスに乗せる必要はない

かった」

13年9月、一審の仙台地裁判決は両親たちの訴えを認め、こう指摘した。

——眼下に海が間近に見える高台の幼稚園で約3分間続いた最大震度6弱の巨大地震を体感したのだから、バスを海沿いの低地帯へ出せば、途中で津波により被災する危険性があることを考慮するべきだった。

園側は一審判決の取り消しを求め、今はお控訴審が続く。

大事な命が誕生した日

その後、一家は、小学校から離れた所へ引っ越した。家まで届く小学生の声を耳に

するのに、どうしようもなく切なかつた。今もランドセルを背負つた新人生を見る

と、「つらい……を通り越していますね」と父は目を赤くする。「そういう幼稚園へ入れてしまつたという罪悪感も出てきて」

時々、父は夢で明日香ちゃんに会う。何事もなかつたように話している。目がさめて現実に引き戻され、落ち込む。

「めんこつた」と父は目を細める。甘え上手な子だった。その性格は誰に似たのでしょうと尋ねれば、「たぶん俺ですね。俺も2人兄弟の弟だから」。

母にとって、1年の始まりは1月1日ではなく、3月11日だ。「また明日香がいない1年が始まった」と思う。

父にとって1年は、明日香ちゃんが生まれた10月20日、大事な命が誕生した記念日から、始まる。

と女性は一言返して、学力向上策が必要だと説き始めた。「うちは結構です」と断つたが、なおも「4年生のうちに土台作りをしなければ」。「結構です」と繰り返すと、女性は「いいんですけど、女性は「いいんですね」。「いいです」と電話を切つた。見ず知らずの人には何も話したくなかったが、悲しみが、次々にわきあがつてきた。その翌日も、電話帳には番号は載せていない。だが、思い当たる節があつた。教育産業のベネッセホールディングスの顧客情報流出事件だ。長女は0歳の時から使つていた。震災の年に事情を打ち明け、教材の購入はやめた▼10月10日。母親はベネッセに電話で問い合わせた。数分待ち、長女の情報をも今回漏えい対象だと知らされた。その晩、私は語つてくれた▼「もう今はいないからいいのだけど思つてほしくない。私は今も愛梨のことを守りたいんですね」。石巻から教わる。耳に届かぬ声に、目に映らぬ日常に、思いをはせたい。

雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの
雄勝病院の話から始めよう。

[第2回]

桑浜育ちの看護助手、今野京子さん

病院のベッド数は40床。いず

れも、長く入院できる療養病床
だつた。

2011年の春。患者の平均
年齢は84歳。話すことも体を動
かすこともできないお年寄りが
多かつた。

看護師たちは、週1回、患者
の手足を洗つた。

週2回、全身を丁寧にふいて
着替えさせた。おしりは、毎日
洗つた。

車椅子に座れる患者は、週1
回、浴室へ連れて行つた。

患者を担架に乗せたまま浴槽
に入る設備はなく、入浴介助
は重労働だつた。支えていなけ
れば、患者は椅子からずり落ち

たり、浴槽で沈んだりする。
病院には20人の看護師に加え
て、彼女たちを手助けする看護
助手8人が勤務していた。

看護助手は、嘱託の職員だ。
正規職員の看護師とはちがつて
宿直勤務はないが、早朝に出勤
する早番や、夜7時過ぎまで勤
務する遅番があつた。

今野京子さんは、勤続11年目
を迎える、8人の中では2番目に
長い経験を積んでいた。

身長は148センチ。体重は
40キロもない。小柄な体に介助
の負担は大きかつた。

「機械がないから、風呂さ入れ

るの、しんどいんだ」「体重80キ
ロの人もいつからさ、大変だあ
……。娘たちにそうこぼしたこ
ともあつた。だが、「仕事をやめ
たい」と口にしたことは一度も
なかつた。

職員の多くは地元の人だつ
た。休憩時間。手作りの総菜や
漬物をはさんで、土地の言葉が
行き交う。

「食べらい」「けつから、けつか
ら。持つて帰つて」

京子さんは、四季折々の海の
幸もふるまつた。

京子さんは、四季折々の海の
幸もふるまつた。

病院の約8キロ先、町の東の
端に近い桑浜から通つていた。
小さな入り江にある桑浜には
20世帯66人が暮らしていた。

タコにホヤ、アワビやウニも職場へ

京子さんは1960年生まれ。2人姉妹の妹だ。その当時の浜には33世帯220人が暮らしていた。

中学生の頃から家業の漁を手伝つた。父親は厳しく、休日も姉妹の朝寝を許さなかつた。両親は、ホヤを養殖するかた。

本ほどを一列に並べ、ワラで結んでいく。結び目が整列した仕上がりは工芸品のようだ。それを祖母は4枚も作った。今も重宝している。

「お父さん、悪いけど、ホヤはタコカゴを仕掛けろ。泥まみれのタコをきれいに洗い、ゆであげる。これも京子さんを喜ばせた。

モスグリーンの軽ワゴンは、

ヒジキは煮てから干す。その前に細かいごみを取る。両親の

晩秋。休暇中に伝吾さんはタコカゴを仕掛け

る。泥まみれのタコをきれいに洗い、ゆであげる。これも京子さんを喜ばせた。

京子さんは、手間を惜しまなかつた。

中学を卒業後、東京へ働きに出た。そこで夫の伝吾さんと出会つた。結婚して家を出た姉に代わり、病身の母親のため、一緒に桑浜へ帰つてきた。

京子さんは、四季折々の海の幸もふるまつた。

京子さんは、四季折々の海の幸もふるまつた。

「お父さん、明日中学を卒業後、東

京へ働きに出た。そこで夫の伝吾さんと出

会つた。結婚して家を出た姉に代わり、病身の母親のため、一緒に桑浜へ帰つてきた。

漁とは無縁に育つた伝吾さんは、まずカツオ船に乗つた。船

酔いに苦しみ、心配した京子さん

は、まずカツオ船に乗つた。船酔いに苦しみ、心配した京子さんが届いたこともある。捕鯨船にも乗つた。長く家をあける。「う

ね、一緒に桑浜へ帰つて、

タコも職場へ持つて行く。ア

ワビもウニも。

春。母の晴子さんに「病院を持ってくから、磯もの、なんば

か、けらいね」と頼む。「いい

から、持つてがい」と言われる

のはわかっていても、一声を忘

れなかつた。

愛車の軽ワゴンにはいつも

クーラーボックスを積んでいた。

17年前に京子さんの父親が他

界した後も、わずかながらホヤ養殖を続けた。販売用ではなく

国内を巡る貨物船で働くこと

に。合間に養殖漁も学んだ。

17年前に京子さんの父親が他

界した後も、わずかながらホヤ養殖を続けた。販売用ではなく

国内を巡る貨物船で働くこと

に。合間に養殖漁も学んだ。

わら、アワビ漁もした。晩秋の

漁には、両親と舟に乗り、かいをこいだ。春には磯で、ノリやマツモ、ツブ貝をとつた。

ノリをすくのに、すのこを使

う。京子さんの祖母の手作りだ。山で刈つてきた草の茎を長

さ約50センチにそろえ、200

個を束ねて、わらを編んでいた。

桑浜は、海辺まで迫る山肌に、はりつくように家が立ち並ぶ。京子さんの家は一番奥の山

際にあつた。

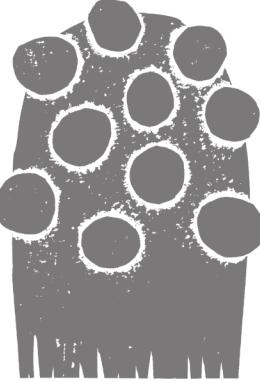
初夏。貨物船を降り、休暇で

帰宅した伝吾さんに、京子さん

は待ちかねたように切り出し

ます」と晴子さんに声をかけた。

モスグリーンの軽ワゴンは、



京子さんは椅子からずり落ちた。患者は椅子からはずり落ちた。看護師たちは、週1回、患者の手足を洗つた。週2回、全身を丁寧にふいて着替えさせた。おしりは、毎日洗つた。車椅子に座れる患者は、週1回、浴室へ連れて行つた。患者を担架に乗せたまま浴槽に入る設備はなく、入浴介助は重労働だつた。支えていなければ、患者は椅子からずり落ちた。

京子さんは1960年生まれ。2人姉妹の妹だ。その当時の浜には33世帯220人が暮らしていた。

中学生の頃から家業の漁を手伝つた。父親は厳しく、休日も姉妹の朝寝を許さなかつた。両親は、ホヤを養殖するかた。

桑浜は、海辺まで迫る山肌に、はりつくように家が立ち並ぶ。京子さんの家は一番奥の山際にあつた。

女川町議会 福島を視察

あまりに甘い…… 「安全神話と同じ」

女川町議会の原発対策特別委員会は今年7月、福島県を訪れた。震災後初めての福島第一原発事故の被災地の視察だ。

12人の町議全員が参加した。初日は浪江町で役場庁舎などを巡った後、避難先の約50キロ内陸の二本松市へ。

原発は大熊町と双葉町にある。浪江町は両町の北隣。役場庁舎は原発の10キロ圏内。町民約2万人は今も避難生活を送る。「699の自治体にお世話になっています」と浪江町長は視察団に語った。

視察団が質問する。原発対策特別委の佐藤良一委員長(69)が口火を切った。

「被災地に共通する課題として、コミュニティをどう維持していくのか」

浪江町議らが答える。「住むか、住まないか、住めないかが左右する。(放射線の)高線量地帯は難しい。活動はしています。お墓のこと。草刈りのこと。努力していますが、非常に残酷な状況が目の前にあるんです」「一言で言うと、維持は極めて困難。こういうことです」

昨年8月の調査では、町へ戻りたい人は18・8%。佐藤委員長は尋ねた。

「その中の小さい子をもつ親は、原発の恐ろしさをどう感じていますか」

浪江町議は数字を示す。震災前、町の小中学生は約1600人だったが、今も避難先で町の小中学校に通う子は47人。「帰りたい人のほとんどは高齢者です」

——3月11日。浪江町は津波対応に追われた。12日朝、国が避難指示を原発の10キロ圏へ広げたことをテレビで知り、役場から約30キロ西、町の山間部へ避難を決定。その後だ。1号機が爆発。14日に3号機も爆発。15日、町は二本松市に避難受け入れを求めた。その間、国や県から連絡はない。避難先の山間部が高線量地帯になっていたことは、後日、知る。

その説明を聞きながら、佐藤委員長はもどかしさを募らせていた。なんでもっと自分たちから情報収集しなかったのか。あまりにも甘かったか。町民を本当に守るなら、風の向きや流れを見る……。

浪江町議会の小黒敬三議長(58)は今こう語る。「安全神話と同じだね。風向きの考えを持っていなかった。それも反省点。明日にも帰れるかという感覚だったから。町外へ逃げる考えは出なかった」

2006年、唯一の男性看護助手、永沼顕さんが加わった。
1987年生まれの最若手。

町の西北、船越で生まれ育つた。祖父母と両親と妹の6人家族。京子さんの末娘とは県立飯野川高校の生活福祉科で同級生だった。

看護助手の1人は、「あきら君が怒るのを見たことがない」と言う。背丈は約178センチ。力仕事を頼まれても、嫌な顔を見せな

玄関前の小路をゆっくり下りて、いき、海辺で曲がると、今度は杉林を縫うように、つづら折りの山道を上る。玄関先の晴子さんは、冬の夜明け前でも、木立の間を見え隠れしながら駆け上がる白いヘッドライトが暗闇の中に消えるまで、見送った。

最若手23歳の看護助手、永沼顕さん

2006年、唯一の男性看護助手、永沼顕さんが加わった。

1987年生まれの最若手。

い。先輩たちには頼もしい後輩であり、わが子同然でもあった。休憩時間にお菓子へ手を出さない顕さんに、先輩たちは「おばあさんを持っててかせらいん」と包んで渡した。祖母との同居をみんな承知している。

顕さんは戦国武将のゲームにはまっていった。休暇に友人と城跡を巡り、誰に言われることもなく、手

以来、定期的に送っていた。そして、あの日。朝、京子さんはシーツを洗濯した。寝具はつねに清潔にしてなら、乗せて行くよ」のちに祖母は患者の遺族からは、おらいのおじいさん、うんとお世話になつたんだがす」

午後1時。遅番の看護助手、顕さんと京子さんが病院に着いた。23歳と50歳のコンビだ。朝から出勤していたもう1人の若い看護助手に、京子さんは早速、味つけ卵をふるまつた。患者の手足を洗うため、それぞれ病室へ。若い助手は勤務を始めてまだ9カ月目。京子さんが「ひとりで無理なら呼んでね。手伝ってあげるよ」と声をかけてくれたことを、彼女は覚えている。



昼過ぎ。出勤時間。

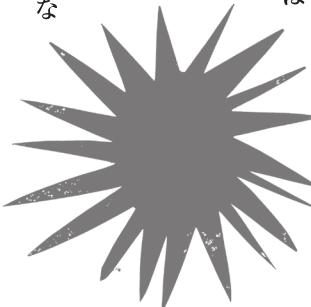
味つけ卵を容器に詰めた。味をとのえたつゆにつけたゆで卵で、三女の大好物だ。それを手に愛車へ。見送りに出てきた母の晴子さんに「行つてまいります」と言つてからもう一言。

「火、気をつけて」

午後1時。遅番の看護助手、顕さんと京子さんが病院に着いた。23歳と50歳のコンビだ。

朝から出勤していたもう1人の若い看護助手に、京子さんは早速、味つけ卵をふるまつた。

患者の手足を洗うため、それぞれ病室へ。若い助手は勤務を始めてまだ9カ月目。京子さんが「ひとりで無理なら呼んでね。手伝ってあげるよ」と声をかけてくれたことを、彼女は覚えている。



顕さんは戦国武将のゲームにはまっていった。休暇に友人と城跡を巡り、誰に言われることもなく、手

のあるときは福子さんの運転手を買って出た。

「ばあちゃん、郵便局さ行くなら、乗せて行くよ」のちに祖母は患者の遺族からは、おらいのおじいさん、うんとお世話になつたんだがす」

2011年の3月初め。京子さんは米30キロを鳥取県の長女一家へ送った。「こっちはおいしくない」と聞かされて

次女の好物、から揚げの準備に台所へ。外出するため玄関に向かう末っ子の三女に「行ってらっしゃい」と声をかけた。